ども當職の身なり、もし世人等、今の將軍こそ日毎に天守に登り、遠鏡もて四方を見下すなどいひはやしなば、ゆゝしき大事なり、承統の前はともかくもあれ、今はさる輕々しきわざはなすまじとのたまひしとぞ、そのかみ紀伊大納言頼宣卿、いとけなくおはしける頃、城の天守にのぼり千里鏡をもて四方を遠見し、大によろこび玉ひ、近習等も興ある事にもてはやしければ、卿いよいよおもしろき事と思し玉ひ、日々天守にて千里鏡をもてあそばされける、或時安藤帶刀直次が其所へ推參し、某にも御見せたまはるべしといひながら、その鏡をとりて直に天守より投おとし、散々に打くだきて後、國主日々櫓にのぼり、遠鏡をもて往來の人を見玉ふとありては、下々ことの外難困するもの多し、よりて某打くだきて候、御秘藏の千里鏡を打くだきし事、思召にかなはざらんには、某を御成敗あるべしと直諫しければ、卿大に恥おもひ玉ひ、この後はかゝる事絶てなし玉はざりしといふことを傳へしが、公には此事聞召し置れたるにはあらざるべけれど、みづから天品の卓越し玉ひしゆゑ、かゝる仰もありしなるべし、

〔中古叢書七十七〕向々舊記寫

一寛文十三丑年五月廿五日、ゑげれす船壹艘入船仕候、〇略中

一在船中相調候諸食物調物代として、〇略中鼻目鏡數三拾八、遠目鏡壹本〇略中

右之通、諸食物調物代として、貨物賣御免被爲成、

〔有德院殿御實紀附錄六〕惇信院殿〇德川家重　いまだ長福君と申けるほど、御輔導の重臣をえらばれ、安藤對馬守信友その任にさゝれて、享保九年十一月十五日に附屬せらる、〇略中若君の御もとにはつけられしにやと、皆人いぶかり思ひしに、そのころ若君の御かたに、長崎より千里鏡を奉れり、いとけなき御心におもしろきものに思召れ、朝夕御庭の山よりこれをもてのぞませ見玉ふに、郭内ゆきゝ衣服の飾まであざやかに見えければ、ことにけうぜさせ玉ひけり、ある日信友に